やまなし 医療最前線

症状に潜む

県立中央病院から

〈228〉

喫煙が主因 推定500万人超

COPD 合併症リスクも

中高年の喫煙者で、たんが絡むせきや息切れがあったら「受診するほどではない」と軽く考えずに、COPD（慢性閉塞性肺疾患）を疑ってみる必要がある。県立中央病院肺がん・呼吸器病センター呼吸器内科の川口諒医師は「COPDは肺の生活習慣病とも言われ、さまざまな合併症を引き起こす。他の生活習慣病と同じように、見過ごさずに治療を開始することで病気の進行を抑えられる」と話す。

川口諒医師

COPDは、慢性気管支炎や肺気腫として診断されていた病気の総称。空気の通り道となる気管支や、酸素と二酸化炭素のガス交換を行う肺の一部「肺胞」が壊れてしまう。肺活量を細かく調べることで診断される。

主な要因として挙げられているのは喫煙だ。川口医師は「COPD患者の約90%に喫煙歴があり、喫煙者の15～20%がCOPDを発症すると考えられている」と指摘する。

人口動態統計によると、COPDによる死亡者は横ばいで推移してきたが近年は増加傾向。2019年は約1万8千人となっている。長年の喫煙習慣を経て発症する「時限爆弾」のような性質があり、喫煙率が高かった過去の影響が現れているとみられる。

初期では透明なたんが絡む軽いせきが出る程度。息切れを感じることがあっても加齢による体力低下と誤解し、気付かずに進行するケースは少なくない。40歳以上の有病率は8・6%（患者数530万人）とする推定データがあるが、2017年の厚生労働省調査では、医療機関で治療を受けている患者数は約22万人にとどまる。「糖尿病や高血圧、脂質異常症などの生活習慣病に比べ認知度が低いのが課題」（川口医師）となっている。

発症後は加齢に伴い息切れの症状が徐々に進行し、発作的な呼吸困難が起きることもある。自力での呼吸が難しくなれば酸素を吸入して生活しなければならなくなる。

「肺だけでなく、体全体にさまざまな症状が起こる可能性がある」と川口医師。風邪やインフルエンザ、新型コロナウイルスなどの感染症で重症化しやすくなる。心臓にも大きな負担がかかるため心不全を合併することがあり、不整脈や肺がん、骨粗しょう症、うつ病などのリスクも高まる。

禁煙が最も大切な治療で、県立中央病院は水曜日に禁煙外来を開設している。このほか、肺に空気が入りやすくするために気管支を拡張する吸入薬を使用。機能が低下した肺でもスムーズに呼吸できる訓練をすることもある。川口医師は「一度壊れてしまった肺を元の状態に戻すことはできない。早期にCOPDの検査を受け、病気の進行を食い止めるために禁煙などの治療を開始することが大切」と話している。

＝「症状に潜む」シリーズは終了します。次回は8月12日に掲載します。

掲載日：2021年07月22日／ぶんくら／紙面頁011
紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社